

看護師の職務満足感と生活満足感に関する研究

著者	朴木 裕美
発行年	2006-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10422/404

氏 名（本籍） 朴 木 裕 美（宮崎県）

学 位 の 種 類 修 士（看護学）

学 位 記 番 号 修 士 第 71 号

学位授与年月日 平成18年3月24日

学 位 論 文 題 目 看護師の職務満足感と生活満足感に関する研究

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	73	(ふりがな) 氏 名	ふのき ひろみ 朴 木 裕 美
修士論文題目	看護師の職務満足感と生活満足感に関する研究		
<p>[目的および方法]：看護師を取り巻く仕事生活と非仕事生活に対する認識を探るとともに、職務満足感と生活満足感との関係や自己効力感および看護師の属性との関連性について検討することを目的として、病院に勤務する看護師を対象に既存の尺度と先行研究を参考に作成した自記式無記名によるアンケート調査を行った。</p> <p>[結果]：自己効力感は年齢、継続勤務年数、臨床経験年数と有意な正の相関を示し、家族環境、居住環境において有意差が認められ、満足感は年齢、臨床経験年数と有意な正の相関を示し、家族環境、職位、最終専門学歴、勤務部署において有意差が認められた。また、自己効力感と満足感とは有意な正の相関を示し、自己効力感の低い人よりも高い人の方が満足感の得点が有意に高かった。職務満足感と生活満足感の構成要素の与える影響を検討するため重回帰分析を行ったところ、個別的職務満足感の「職業的地位」「看護業務」が、個別的生活満足感の「自然との触れあい」「十分な余暇時間」「家族との関係」「文化施設や社会資本の充実」「友人・知人とのつきあい」が、直接的な影響要因となっていた。職務満足感と生活満足感の関係は、対象者自身が捉えている認識では流出モデルが全体の約 5 割と最も多く、統計的にも両者は有意な正の相関を示し、基本的に流出モデルが支持されていることが明らかとなった。</p> <p>[考察]：以上の結果を踏まえ、年齢が低く、継続勤務年数も臨床経験年数も浅い新人看護師および多重役割を担っている中堅看護師の自己効力感を高め、満足感の低下を阻止することが重要な支援と考えられた。また、自己効力感は満足感を予測する因子となり得ることが示され、一般性セルフ・エフィカシー尺度は個人にもまた集団に対しても有用であると考えられた。さらに、職務満足感と生活満足感の関連性が示されたことから、今後の人事・看護管理は看護師として働く人々の仕事生活への関与だけでなく、非仕事生活へも視野を拡げて捉えていく必要性に迫られていることが示唆された。</p> <p>[総括]：本研究において、以下のことが明らかになった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生活において仕事よりも家庭に関心が置かれているのにもかかわらず、現実の行動では仕事が約半分以上を占め、物理的にも精神的にも拘束されているという現状が存在し、職務満足感低下に寄与していると考えられた。 2. 職務満足感と生活満足感の関係において、対象者自身が捉えている認識では流出モデルが全体の 5 割を占めており、また個別的職務満足感と個別的生活満足感および職務満足感と生活満足感はそれぞれ正の相関を示し、流出モデルが成り立つことを支持していた。 3. 自己効力感が満足感の予測因子になり得る可能性をもつことが確認された。 4. 看護師の属性は自己効力感や満足感に影響を及ぼしていた。なかでも年齢や臨床経験年数、家族環境は双方に共通する影響因子となっていた。 5. 今後の人事・看護管理は看護師として働く人々の職務満足感の源泉を仕事そのものだけに限定せず、非仕事生活までも包含して枠組みを拡げた生活全体を捉えて Quality of Working Life の向上の道を探るという視点をもつ必要性が示唆された。 			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。